

「本町・西国街道ガイド」



かこがわ人の会

平成27年10月15日



発行 研修部会

目 次

弘法大師堂（大川町のお大師さん）	P 1
加古川図書館	P 1
宝湯	P 2
仏頂山 称名寺	P 2
薬王山 常住寺	P 3
ニッケ社宅・洋館	P 3
加古川改修記念碑	P 4
春日神社（赤壁明神）	P 5
西国街道	P 5
神田家洋館	P 6
陣屋（山脇邸）	P 7
常安山 光念寺	P 7
洞切れ地蔵	P 8
一鱗山 龍泉寺	P 8
下居の清水（おりいのしみず）	P 9
和泉式部の宝篋印塔	P 10
念佛山 教信寺	P 11
野口神社	P 11
賀古の駅家跡	P 12
駅ヶ池	P 12

弘法大師堂（大川町のお大師さん）

嘉永3年（1850年）、ここ大川町境界で疫癘が流行し多くの人々が亡くなったことから、高野山から弘法大師の「御霊」を受けて建立されたのが「大川町のお大師さん」です。

併せて子安地蔵と延命地蔵が祀られ、子供の平安長寿・新しい命の誕生を願う人たちの信仰を集めています。

太子の命日、20日と地蔵盆の8月23日には念仏が、そして24日にはお参りの方々への「お接待」が賑やかに催されます。

加古川図書館

昭和10年（1935年）旧加古川町の公会堂として建てられたもので、平成20年県が指定する景観形成重要建築物に選ばれた歴史的な建物です。

正面の窓は、アールデコ風の幾何学文様にデザインされたステンドグラスのアーチ窓と、側面の連続アーチ窓や、スクラッチタイル張り一階正面部分などに趣（おもむき）があります。

建物横に残る松の木の側で戦時中、三島由紀夫が徴兵検査を受けた場所とされています。

（昭和19年、20年の2回）

現在、加古川市内の図書館は4ヶ所、ここ加古川図書館は約15万冊の蔵書を誇り、交通の利便性からも多くの利用者が訪れています。

近頃は、老朽化のため、雨漏り、耐震不足などが問題に

なっており、図書館としての存続、廃止が考えられているようです。

宝 湯

加古川市で現存する唯一の銭湯です。昭和4年「敷島湯」としてスタートして、86年になります。昭和32年「宝湯」に改名されました。

昭和44～45年頃が最盛期で市内に16軒の銭湯があり、市民の社交場、情報交換の場として賑わったそうです。

8のつく日が定休日で、入浴料は大人350円、小学生120円、幼稚園児60円になっています。

仏頂山 称名寺

称名寺一帯は、戦国時代の加古川城と考えられ、「城ノ開地」という地名も残っています。

織田信長が中国地方を支配する毛利氏と敵対するようになると、両者はその間に位置する播磨を巡って争うようになりました。

播磨の諸大名は、信長の急速な進出を恐れ、織田氏に属しました。

天正6年(1578年)3月、信長の家臣羽柴秀吉は、毛利氏平定のため播磨国に下り、加古川の糟屋氏の館に到着、同所を本陣としました。

秀吉は播磨国内の諸城主を集め、軍評定を行った。その後、信長・秀吉に不信感をもった別所長治が反旗をひるが

えし、三木合戦(天正6～8年、1578～1580年)に至りました。

織田氏側の軍評定が行われた糟谷館が加古川城です。

堅固な城郭ではなく、簡単で小規模な城館あったと言われております。

真言宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。

山門を入ると銀杏の大木があり、

昔から加古川のまちの目印でした。

薬王山 常住寺

曹洞宗の寺院で、用明天皇の御世(585～587年)に聖徳太子が創建したと伝えられています。

本尊薬師如来は、太子の御作として霊験あらたかなことは、その昔より知られるところです。

昭和26年まで寺家町に開創以来所在していた常住寺は、隣接するニッケより移転要請を受け、駅前に移転、又その後の駅前開発により、昭和55年3月本町3丁目の現在地に移転しました。

名前と違って点々と移転しています。

境内には、「播州名所巡覧図絵」にも別府の「手枕の松」などと共に、播磨の名松として登場しています。

現在4代目「鹿児の松」があります。

ニッケ社宅・洋館

大正時代以降整備された社宅が、まだ沢山残っています。

「火垂るの墓」や「少年H」等、多くの映画のロケにも使われています。

ニッケの洋館は、明治 31 年に日本毛織が加古川工場を建設する際に、現場事務所として建てられたものを、宿舎として現在の場所に移転した洋館です。

加古川唯一の異人館と言われ、遠くから訪れる見物人も多いとのこと。

加古川改修記念碑

加古川橋東詰め、春日神社横に建てられています。改修に携わった人は延べ 121 万人、うち死傷者 312 人という大工事によって流域の人々を水害から解放した。改修の記念と慰霊の意を込めた碑です。

碑の表には当時の内務大臣の書、裏には県知事の文が書かれています。

工事は 16 年の歳月と、約 600 万円の巨費を投じ、左岸は加東郡市場村、右岸は加東郡来住村から海までに及びました。

工事完成の昭和 8 年の国家予算は、23 億円だったので、比率から見ると約 600 万円の総工費がいかに大規模な工事であったかがわかります。

(平成 27 年度一般会計予算は 96.3 兆円)

記念碑を見ることにより、そんな先人の苦労を偲ぶ機会になればと思います。

特にあの多木久米次郎氏の尽力には、頭が下がります。多木久米次郎氏は、安政 6 年 (1859 年) 加古郡別府村 (現在、加古川市別府町) で生まれ、我が国で初めて人造肥料を開発された多木化学(株)の創業者です。

「神代鍬」のマークのついた肥料袋を見られた人も多いと思います。

経営者としてだけでなく、政治家 (現在の参議院議員) としても別府町、加古川市のために活躍された人です。

春日神社 (赤壁明神)

文治元年 (1186 年) ころ、時の雁南荘の領主、糟屋有季が奈良本宮の春日大社から分霊を迎えて建立しました。

加古川城主糟屋武則は有季の子孫です。

境内には赤い壁が印象的な「丸亀神社 (通称赤壁さん)」があります。

この赤壁さんには化け猫伝説が伝えられており、映画化もされました。

赤壁さんはバクチにご利益があるそうで、ご神木の夫婦銀杏があります。

西国街道

江戸時代に京都 (羅生門) から下関 (赤間関) までを結ぶ街道で、参勤交代の大名、旅人が利用した主要道路です。

加古川橋東詰めから本町商店街、寺家町商店街へと続いています。

寺家町商店街は江戸時代加古川宿として姫路藩の役所も置かれ、参勤交代の大名の本陣、脇本陣が置かれた道路です。

神田家洋館

加古川町本町の「神田家住宅」です。

大正時代に応接兼倉庫として建築、煉瓦とコンクリート造りで、地上2階建・地下1階・58㎡あり、内部は神殿を思わせる床の間や、陶器を塗りこんだ壁など、独特の世界観が広がっています。

加古川随一のにぎわいを見せた本町商店街（昭和初期は80店舗）の町屋の中で、初期の洋風建築の面影を残し、ひととき異彩を放っていたといわれています。

本町商店街は、加古川の商店街発祥の地として、加古川橋の東詰めから寺家町商店街までの広さを誇り、ニッケの繁栄と共に歩んできましたが、現在では4店舗のみとなっています。

所有者の神田さんは、当時「洋館が盛んに建てられた神戸には負けん、という職人の気概でこういう形になったのかも知れない」と話しておられます。

「なんでもやってやろう」という独創的な遺志を受け継いでいこうとしておられます。国の有形登録文化財になっています。

陣屋（山脇邸）

古くは莊園時代、寺院は大きな土地を所有していました。その寺領を管理する官職を寺家と言っていました。

その寺家が集まっていた町を寺家町と言ったそうです。

寺家町商店街は江戸時代には加古川宿として、姫路藩の陣屋を置き、大名の宿舎である本陣、脇本陣や武士、庶民用の旅宿（はたご）、商店などで大いに賑わったそうです。

寺家町商店街の西入口「人形の陣屋」の東に1752年姫路藩の加古川役所として、陣屋が建てられ、参勤交代で通行、宿泊する大名の接待としても使われていました。

参勤交代の始まりは、徳川3代将軍家光の寛永12年（1635年）で、終りは、大政奉還が行われた慶応3年（1867年）です。

明治時代には、旅館となりましたが、明治18年8月に明治天皇が山陽道巡幸の際、立ち寄られて、縁側に並べられた盆栽が気に入られ、「樹恵堂」の名が贈られました。

現在は市指定文化財となっていますが、個人所有（山脇邸）で中に入ることは出来ません。

常安山 光念寺

浄土真宗大谷派の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。慶長元年（1596年）本多西賢の創始と言われています。

境内には、松岡青羅の墓、顕彰碑があります。

境内の墓碑には、「舟ばたや 履（くつ）ぬぎ捨（す）つる 水の月」の辞世の句が刻まれています。

又、鶴林寺にも別の句碑があります。

第3代龍心の妻は、赤穂義士、原惣右衛門の妹であることから、惣右衛門ゆかりの書状や、枕屏風（源平合戦図）、大石良雄の桜石が残っており、隠れた桜の名所です。

胴切れ地藏

加古川町平野の旧西国街道沿いにあるこのお地藏さんは、伝説によると、江戸時代にこのお地藏さまを大層信仰していた男がいました。

ある日お参りの後、考え事をしていた男が、うっかり参勤交代の行列の前を横切ってしまいました。

「何たる無礼か」と供の侍に胴体を真っ二つに切られてしまいました。

行列が通り過ぎたあと、ふと気が付くと自分の胴体は何とも無く、お地藏さんの胴体が真っ二つになっていました。

お地藏さんが身代わりになって下さったと、付近の住民は一層信仰するようになり、「胴切れのお地藏さん」と呼び大切にお祀りしています。

お堂の裏の窓から覗くと、お地藏さんの胴が「なるほど真っ二つ」です。

8月23、24日の地藏盆には沢山のお参りがあり、お接待があります。

一鱗山 龍泉寺

昔（1274年）寺家町に大きな池があり、そこに大蛇が

住んでいて、毎年若い女性を生贄にしていたという逸話があります。

あるとき旅の僧（観智上人）が通りかかり、大蛇を退治してくれました。その池の側に建てたのが龍泉寺です。

江戸時代より浄土宗で、本山は禅林寺（永観堂）です。ニッケ工場進出の際（大正5年）にこちら（加古川町平野）に移転したそうです。

門を入れて左奥の南北朝時代に造られた五輪塔がありますが、もともとは西国街道沿いに建てられていたようで、道路拡幅工事でこちらに移設しました。

竜山石で造られていますが、なぜか下から二段目だけが花崗岩だそうです。

昭和59年境内のお堂に、子供文庫を開校、児童書・仏教書等5千冊の蔵書が並んでいます。

下居の清水（おりいのしみず）

江戸時代の「播州名所巡覧図絵」に描かれている下居の清水という井戸があった場所です。

昔は街道沿いの要所に水場が必要だった為、井戸が掘られたと思われます。

大層賑わった賀古の駅家や教信寺が近くにあることから、沙弥教信と村人が一緒になって、井戸を掘っている姿が浮かべられます。

太古は、この近くまで海岸であったと言われ、瀬戸内海に行く船がここで、飲み水などを汲んだと言われています。

「折井の清水」「織井水」「細田の清水」とも呼ばれています。

和泉式部の宝篋印塔

南北朝時代に造られた塔で完全な形で保存されています。和泉式部の供養塔と言われ、県指定文化財となっています。

和泉式部は平安時代中期の歌人で、三十六歌仙の一人、小倉百人一首に歌が納められています。

「あらざらむ此（この）よの外（ほか）の思出（おもひで）に 今（いま）ひとたびのあふ事（こと）もがな」
です。

源氏物語の紫式部と同僚であったらしく、紫式部日記に「和泉式部は恋文や和歌は素晴らしいが、素行には感心できない」と記されています。

和泉守の妻になりましたが、別居状態となり、冷泉天皇（為尊親王）と身分違いの熱愛が世を騒がせ、親より勘当され、為尊親王と死別後、今度は弟親王と一子を設けるもまたしても死別。

その後、藤原道長の家人と再婚し、丹後に下りましたが晩年の動静は不明です。

よって全国（岩手県～佐賀県まで）十数か所に式部の生誕地、墓所が伝承遺跡として伝わっています。

念佛山 教信寺

天台宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。

平安時代前期の僧、沙弥教信がこの野口に庵をつくりました。

念仏を唱えながら、仏の教えを説き、お百姓の手伝いをし、わらじを作って貧しい人に与えたり、旅をするお年寄りの荷物を運んだりして、大勢の人を助けたことから、「荷送り上人」や「阿弥陀丸」と呼ばれました。

庶民仏教の普及に努めた庵跡に建てられたのが教信寺です。境内の左手奥に教信上人廟があります。

春には満開の桜が境内を彩ります。

9月の「野口念仏」が有名で、室町時代には、堂宇 13、僧坊 48 を数える大伽藍だったと伝えられ、承和 3 年（836 年）開基と言われています。

秀吉の播磨攻めの際、長井氏の野口城と共に戦禍にあい、寛永 19 年（1642 年）に再建されました。

江戸時代末期までは浄土宗でした。

平成 27 年 9 月上人の 1,150 回忌法要が執り行われました。

野口神社

旧西国街道にある神社の主神は、日吉大神（ひえおおかみ）で、比叡山延暦寺の守護神日吉大社から、分霊をお迎えし、後に 4 柱の神を合わせ祀ったという説もあります。4 柱の神は熊野大神、八幡大神、八坂大神、日岡大神です。

天台宗の広がりと共に社殿は江戸時代初期、慶安 4 年 (1651 年) に建てられ、鳥居は寛文 6 年 (1666 年) に建てられました。

「山王五社宮」と称されていましたが、明治時代の「神仏判然令」により、野口神社に改称されました。

注連鳥居には、頼山陽の漢詩が彫られています。

狛犬は寛政 10 年 (1798 年) の銘があります。

西国街道は参勤交代の大名は勿論、伊能忠敬も通行したと言われていました。

安産、学業成就、厄除けなどに神徳があります。

心のよりどころであり、樹齢数百年の木々が茂り、パークスポットとしても有名です。

賀古の駅家跡

駅家 (うまや) とは、古代の官道で役人の公用旅行の便宜を図る為に置かれた連絡宿泊などの施設のことで、古大内遺跡が賀古の駅家と言われていました。

平安時代の「延喜式」によると、賀古の駅家の駅馬の数は 40 匹で、主要官道の駅家が通常 20 匹だったのに比較すると、格段に多く規模としては、日本最大の駅家だと言われていました。

駅ヶ池

平安時代の初め、賀古の駅家北辺に住んでいた沙弥教信

が農民の救済に身を砕き、灌漑用の池として造ったのが駅ヶ池 (別名前の池) です。

この池には、教信上人にまつわる伝承「片目の上人魚」が残っています。

あるとき村人に魚を出された教信上人は、魚を食べました。ところが村人に、「仏に仕える身で殺生をする」と言われ、食べた魚を池で吐きました。

すると魚は生き返って泳ぎだし、人々は驚いて殺生をやめました。

その後池では片目の魚が見られるようになったとされています。江戸時代中期の「播磨鑑」に掲載されています。

それから約 400 年経た今、池も当初 12ha あったものが 3 分の 1 になっています。池の南の堤防は古代山陽道の跡と言われています。